

食堂

森鷗外

青空文庫

木村は役所の食堂に出た。

雨漏りの痕あとが怪しげな形を茶褐色に画えがいている紙張の天井、濃淡のある鼠ねずみいろ色に汚れた白壁、廊下から覗のぞかれる処だけ紙を張った硝子窓がらすまど、性の知れない不潔物が木理もくめに染み込んで、乾いた時は灰色、濡ぬれた時は薄墨色に見える床板。こう云う体裁の広間である。中にも硝子窓は塵ちりがいやが上に積もっていて、硝子というものの透き徹とおる性質を全く失っているのだから、紙を張る必要はない。それに紙が張つてあるのは、おおかた硝子を張つた当座、まだ透き徹つて見えた頃に発明の才のある役人がさせた事だろう。

この広間に白木の長い卓と長い腰掛こしとが、小道具として据え附けてある。これは不断片附けてある時は、腰掛が卓の上に、脚そらぎまを空そら様にして載せられているのだが、丁度弁当を使う時刻なので、取り卸されている。それが食事の跡でざつと拭ふくだけなので、床と同じ薄墨色になっている。

一体役所というものは、随分議会で経費をやかましく言われるが、存外質素に出来ていて、貧乏らしいものである。

号砲たたくに続いて、がらんがらんと銅の鐸たたくを振るを合図に、役人が待ち兼ねた様に、一度に

出て来て並ぶ。中にはまかないの飯を食うのもあるが、半数以上は内から弁当を持って来る。洋服の人も、袴はかまを穿いた人も、片手に弁当箱を提げて出て来る。あらゆる大きさ、あらゆる形の弁当が、あらゆる色の風炉ふうろ鋪しきに包んで持ち出される。

ずらつと並んだ処を見渡すと、どれもこれも好く選んで揃そろえたと思う程、色の蒼あおい瘦やせこけた顔ばかりである。まだ二十はたちを越したばかりのものもある。もう五十近いものもある。しかしこの食堂に這はい入いつて来るコンマ以下のお役人には、一人も脂あぶら気けのある顔はない。たまに太った人があるかと思えば、病身らしい青ぶくれである。

木村はこの仲間ではほとんど最古参なので、まかない所の口に一番遠い卓の一番壁に近い端に据わっている。角力すもうで言えば、貧乏神の席である。

「ウイザ ウイイス ウイサ ウイイス」の先生は、同じ瘦せても、目のぎよろつとした、色の浅黒い、氣の利いた風の男で、名を犬塚という。某局長の目金めがねで任用せられたとか云うので、木村より跡から出て、暫しばらくの間に一給俸まで漕こぎ附けたのである。

なんでも犬塚に知られた事は、直ぐに上の方まで聞える。誰たれでも上官に呼ばれて小言を聞いて見ると、その小言が犬塚の不断言っている事に好く似ている。上官の口から犬塚の小言を聞くような心持がする。

犬塚はまかないの飯を食う。同じ十二銭の弁当であるが、この男の菜^{さい}だけは別に煮てある。悪い博奕^{ばくちう}打ちがいか物の賽^{さい}を使うように、まかないがこの男の弁当箱には秘密の印を附けているなぞと云うものがある。

木村は弁当を風炉鋪から出して、その風炉鋪を一応丁寧^{たいた}に畳んで、左のずぼんの隠しにしまった。そして弁当の蓋^{ふた}を開けて箸^{はし}を取るとき、犬塚が云った。

「どうとう恐ろしい連^{れんじゆう}中の事が発表になつちまつたね。」

木村に言つたわけでもないらしいが、犬塚の顔が差し当り木村の方に向いているので、木村は箸^やを輟めて、「無政府主義者ですか」と云った。

木村の左に据わっている、山田というおとなしい男が詞^{ことば}を挟んだ。この男はいつも毒にも薬にもならない事を言うが、思の外正直で情を偽らないらしいので、木村がいつか誰やうに、山田と話をするのは、胡坐^{あぐら}を搔^かいて茶漬^{ちぢ}を食っているようで好いと云ったことがある。その山田がこう云った。

「どうも驚いちまつた。日本にこんな事件が^{しゅつたい}出来^いしようとは思わなかつた。一体どうしたというのだろう。」

犬塚が教えて遣^やるといふ口吻^{こうふん}で答えた。「どうしたもこうしたもないさ。あの連中の

目には神もなけりやあ国家もない。それだから刺客せつかくになっても、人を殺しても、なんのために殺すなんという理窟はいらぬのだ。殺す目当になつてゐる人間がなんの邪魔になつてゐるといふわけでもない。それを除いてどうするといふわけでもない。こないだ局長さんに聞いたが、十五年ばかり前の事だそうさ。巴里パリイで Emile 《エミル》 Henry 《アンリイ》とかいふ奴やつが探偵の詰所に爆裂弾を投げ込んで、五六人殺した。それから今一つの玉を珈琲店コオファイテンに投げ込んで、二人を殺して、あと二十人ばかりに怪我をさせた。そいつが死刑になる前に、爆裂弾をなんに投げ付けても好いといふ弁明をしたのだ。社会は無政府主義者を一纏まとめに迫害してゐるから、こつちも社会を一纏めに敵にする。無辜むこの犠牲とはなんだ、社会に生きてゐるものに、誰一人労働者の膏血こうけつを絞つて、旨い物うまを食つたり、温い布団の上に寝たりしてゐないものはない。どこへ投げたつて好いと云うのだ。それが君主を目差すとか、大統領を目差すとかいふことになるのは、主義を広告する効果が大きいからだと言ふのだ。」

「焼けな話だね」と、山田が云つた。

犬塚は笑つて、「どうせ色々な原因から焼けになつた連中が這入るのだから、無政府主義は焼けの偉大なるものと云つても好かろう」と云つた。

役所には所々の壁に、「静かに歩むべし」と書いて貼^はつてある位であるから、食堂の会話も大声でするものはない。だから方々に二三人ずつの会話の群が出来て、遠い席からそれに口を出すことはめつたに無い。

「一体いつからそんな無法な事が始まったのだろう」と、山田が犬塚の顔を見て云った。

「そんな事は学者の木村君にでも聞かなくちや駄^だ目^めだ」と云つて、犬塚は黙つてこの話を聞いている木村の顔を見た。

「そうですね。僕だつて別に調べて見たこともありませんよ。無政府主義も虚無主義も名附親は分かっていますがね。」いつでも木村は何か考えながら、外の人より小さい声で、ゆつくり物を言う。それに犬塚に対する時だけは誰よりも詞遣いが丁寧である。それをまた犬塚は木村が自分を敬して遠ざけるように感じて、木村という男を余り好くは思っていない。

「虚無主義とは別なのかね」と、山田が云った。

木村はこう話が面倒になつて来ては困るとでも思ふらしく、例の小さい声でしぶしぶ云つた。

「別に虚無主義なんという纏^{まと}まつたものがあつたのではないから、無政府主義のような極

まった思想が成り立つてからは、人があんな詞を使わなくなったのだろう。」

「名附親は誰だね」と、犬塚が云った。

「自分で anarchist 《アナルシスト》と名告^なつて、君主だの主権者だのというものを認めない、人間の意志で縛つては貰わないと書いたのは Proudhon 《プルウドン》で、六十年程前（1849）の事でした。Nihiliste 《ニヒリスト》の方は、犬塚君はいろんな文学雑誌なんぞを好く見ておられるから御承知でしょうが、Turgenev 《ツルゲニエフ》の父等と子等という小説に書いてある造語ですね。あれの出たのは五十年程前（1862）でした。」

「それでは無政府主義の方が先きじゃないか」と、山田が云った。

「それはそうだ。しかしツルゲニエフがあの小説を書いた時には、まだ Bakunin 《バクニン》が無政府主義をロシアへ持つて帰つてはいなかつたのだ。それに虚無ということも、あの小説に書いてあるのと、後に広く使われるようになってからの虚無とは、まるで違っている。丁度 snob 《スノップ》という詞だつて、最初に Thackeray 《サツカレイ》が書いた時の意味と、今の意味とはまるで違つているようなものだ。バクニンがロシアへ帰つてからの青年の思想はツルゲニエフが、父等と子等ではない、あの新しい国という方の小説に書いている。」

「君馬鹿に精しいね」と、犬塚が冷かした。

「なに文学の方の歴史に、少しばかり気を付けているだけです。世間の事は文学の上に、影がうつるようにつつていますから、間接に分かるのです。」木村の詞は謙遜けんそんのようにも聞え、弁解のようにも聞えた。

「そうすると文学の本に発売禁止を食わせるのは影を捉とらえるようなもので、駄目なのだろうかね。」

木村が犬塚の顔を見る目はちよいと光った。木村は今云ったような犬塚の詞を聞く度に、鳥さしがそつと覗うかがい寄つて、繭もちぎ竿おの尖さきをつと差し付けるような心持がする。そしてこう云った。

「しかし影を見て動くものもあるので、影を消すのが全く無功ではないでしょう。ただ僕は言論の自由を大事な事だと思つていますから、発売禁止の余り手広く行われるのを歎かわしく思うだけです。勿論政略上や已むことを得ない場合のあることは、僕だつて認めています。」

「ロシアのような国では盛んに遣つているといふじやないか」と、山田が云った。

「そりゃあ caviar 《カウイア》にする」と、犬塚が厭いやらしい笑い顔をした。これも局長に

聞いた詞であろう。

山田は目を睜みはっている。

木村は山田の顔を見て、気の毒がるような様子をした。そしてこう云った。

「あれは外国から這入る印刷物を検閲して、活版に使う墨で塗り消すことさ。黒くするか
らカウイアにするというのだろう。ところが今年は剪刀はさみで切ったり、没収したりし出した。
カウイアは片側で済むが、切り抜かれちや両面無くなる。没収せられればまるで無くなる
。」

山田は無邪気に笑った。

暫く一同黙つて弁当を食っていたが、山田は何か気に掛かるといふ様子で、また言い出した。

「あんな連中がこれから殖えるだろうか。」

「殖えられて溜たまるものか」と、犬塚は叱しかるように云つて、特別に厚く切つてあるらしい
沢庵たくあんを、白い、鋭い前歯で咬かみ切つた。

「木村君、どうだろう」と、山田は不安らしい顔を右隣の方へ向けた。

「先ずお国柄だから、当局が巧たくみに柁かじを取つて行けば、殖えずに済むだろう。しかし遣りよ

うでは、激成するというような傾きを生じ兼ねない。その候補者はどんな人間かと云うと、あらゆる不遇な人間だね。先年壮士になったような人間だね。」

茶を飲んで席を起つものがちらほらある。

木村は隠しから風炉鋪を出して、弁当の空箱を畳んで包んでいる。

犬塚は楊枝ようじを使いながら木村に、「まあ、少しゆっくりし給え」と云った。

起ち掛かっていた木村は、また腰を据えて、茶碗に茶を一杯注いだ。

二人と一しよに居残った山田は、頻しきりに知識欲に責められるという様子で、こんな問を出した。

「実は無政府主義というものは、どんな歴史を持つているものかと思つて、こないだもある雑誌に諸大家の話の出ているのを読んで見たが、一向分らない。名附親は別として、一体どんな人が立てた主義かねえ。」

犬塚は、「なんにしろ五六十年このかたの事だから、むずかしい歴史はないさ」と云つて、木村の顔を見て、「君は大概知つているだろう」と言い足した。

木村は少しうるさいと思つたらしく顔を蹙しかめたが、直ぐ思い直した様子でこう云った。

「そう。僕だつて別に研究したのではありませんが、近代思想の支流ですから、あらまし

知っています。五十年余り前（1856）に死んだMax《マックス》Stiner《スチルネル》が極端な個人主義を立てたのが端緒になると、一般に認められているようです。次は四十年余り前（1865）に死んだProudhon《プルウドン》で、Kropotkin《クロポトキン》が無政府主義の父と云ったのが当たっているかどうかは別として、さつきも言ったように、名附親だということだけは確かです。次は始て無政府主義を實行しようとしたMichael《ミカエル》Bakunin《バクニン》で、三十年余り前（1876）に死んでいます。それからこつちで名を知られているのは、ロンドンに逃げて行っていて、もう七十近くになっている（1842生れ）Peter《ペエテル》Alexejewitsch《アレクセエウイチ》Kropotkin《クロポトキン》で、その外には亜米利加にTucker《タツカア》のような人物があるだけでしょう。」

「なかなか精^{くわ}しいね」と、犬塚がまた冷かした。

熱心に聞いていた山田がまた口を出した。「一体その二三人の大^{おお}頭^{あたま}はどんな人間かねえ。」

木村は右の脇^{ひじ}を卓^つに衝^ついて、頭を支えて、やや退屈らしい様子をして話している。

「スチルネルは哲学史上に大影響を与えている人で、無政府主義者と云われている人達と

一しよにせられては可哀相だ。あれは本名を Johann 《ヨハン》 Kaspar 《カスパー》 Schmitt 《シユミット》と云つて、柏林ベルリンで高等学校の教師をしていた。有名な、唯一者とその所有を出す時に、随分極端な議論だから、本名を署せずに出したのだ。しかし今では Reclam 《レクラム》版になつていて、誰でも読む。Proudhon 《プルウドン》は [Besanc, o] 《ベサンソン》の貧乏人の子で、小さい時に、活字拾いまでしたことがあるそうだ。それでもとうとう巴里パリイで議員に挙げられるまで漕こぎ付けた。大した学者ではない。スチルネルと同じように、Hegel 《ヘゲル》を本尊にしてはいるが、ヘゲルの本を本当に読んだのではないと、後で自分で白状している。スチルネルが鋭い論理で、独創の議論をしたとは違つて、大抵前人の言つた説を誇張したに過ぎない。有名な、占有は盗みだという語ことばなんぞも、プルウドンが生れるより二十年も前に、Brisot 《ブリゾオ》が云つている。プルウドンという人は先ず弁論家といふべきだろう。それからバクニンは、莫斯科モスコオと彼得堡ペテルブルグとの中間にある Pyramuchino 《プリヤムヒノ》で、貴家の家に生れた人で、砲兵の士官になつたが、生れ付き乱を好むという質たちなので、間もなく軍籍を脱して、欧羅巴中を遍歴して、到る処に騒動を起させたものだ。本国でシベリアへ流された外に、諸方で獄つなに繋がれたことがある。無政府党事件としては一番大きい Jura 《ユラ》の時計職人の騒

動も、この人が煽動せんどうしたのだ。瑞西スウイスにいるうちに、Ben 《ベルン》で心臓病になつて死んだ。それからクロポトキンだが、あれはSmolensk 《スモレンスク》公爵の息子に生れて、小さい時は宮中で舎人とねりを勤めていた。それからカザアキ騎兵の士官になつてシベリアへ遣やられて、五年間在勤ざいしんしていて、満州まで廻つて見た。その頃種々な人に接触した結果、無政府主義になつたのだそうだ。それから彼得堡の大学に這入つて、地学を研究した。自分でも学術上に価値のある事業は、三十歳の時に刊行した亜細亞アジヤ地図だと云つてゐる。Jura 《ユラ》へ行つたのも、英国で地学上の用務を嘱しよくたく托たくせられて行つたのだ。亜米利加のタツカアなんぞはプルウドンの翻訳をしている位のもので、大した人物ではない。

木村が暫く黙つてゐると、犬塚が云つた。「クロポトキンは別品べつぴんの娘を持つてゐるといふじやないか。」

「そうです。大相世間で同情してゐる女の方ですよ」と、木村は答えて、また黙つてしまつた。

山田が何か思い出したという様子で云つた。「こん度の連中は死刑になりたがつてゐるから、死刑にしない方が好いというものがあるそうだが、どういふものだろう。」

敷島しきしまの烟けむりを吹いていた犬塚が、「そうさ、死にたがっているそうだから、監獄で旨い物を食わせて、長生をさせて遣るが好よかろう」と云つて笑つた。そして木村の方へ向いて、「これまで死刑になつた奴やつは、献身者だというので、ひどく崇あがめられているというじゃないか」と云つた。

木村は「Ravachol 《ラワコオル》—Vaillant 《ワイヤン》—Henry 《アンリイ》—Caserio 《カゼリオ》」と数を読むように云つて、「随分盛んに主義の宣伝に使われているようですな」と言い足した。

「どれ」と云つて、犬塚が紙巻の燃えさしを灰吹の中に投げたのを合図に、三人は席を起つた。

外ほかを片付けてしまつて待つていた、まかないの男が、三人の前にあつた茶碗や灰吹を除のけて、水をだぶだぶ含ませた雑ぞうきん巾きんで、卓たくの上を撫なで始めた。

(明治四十三年十二月)

青空文庫情報

底本：「普請中 青年 森鷗外全集②」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年7月24日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版森鷗外全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月～9月刊

入力：鈴木修一

校正：mayu

2001年7月31日公開

2006年4月30日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

食堂

森鷗外

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>